報告用紙②

関西学院大学　研究成果報告

２０２０年　４月　８日

関西学院大学 学長殿

所属：文学部
職名：教授
氏名：加藤哲弘

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	☑特別研究期間　□自由研究期間 □大学共同研究　□個人特別研究費 □博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	「絵画の受容美学」研究
研究実施場所	ヴェネツィア、ハンブルク、東京ほか
研究期間	２０１９年　４月　１日　～　２０２０年　３月３１日（　１２ヶ月）

◆ 研究成果概要　(2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

◆当初の目的と達成成果

1. 本研究の第一の目的は、ハンブルク大学で美術史学教授を務めていたヴォルフガング・ケンプ（現在リューネブルク大学客員教授）によって美術史研究に導入された「受容美学」の、方法論としての特質と有効性を、テクストの確認と関連作品のもとでの検証によって明らかにすることにあった。ケンプ自身による解釈の事例は、ヨーロッパ中世の工芸品から日本の浮世絵にまで及んでいる。また、その基礎となっている受容美学は、現象学、解釈学、感情移入美学など基礎理論との深いつながりを有している。これらの方法論的関連の解明は、現在の美学が直面している諸問題にアプローチする際に、きわめて有効な示唆を提供することが予想された。

成果として確認できたのは以下の3点である。

(1) ケンプと受容美学を安易に結び付けないこと。ケンプがアメリカ滞在時に「新しい美術史学」を推進する美術史家たちとともに受容コンテクスト研究に向かったのは事実である。しかし、彼が採りあげる主題の範囲は、写真や建築、物語絵画や美術教育論など、驚くほど多岐にわたる。この越境する美術史家の仕事は、これまで（報告者自身も含めて）「受容美学」という枠に限定されて語られることが多かった。その反省をもとに、今後、彼の業績は、いわばイメージ学全体の展開の中で位置づけることが求められることになるだろう。

(2) 一方、受容美学という研究方法論についても、これまでの、イーザーとヤウスを中心にした捉え方に見直しが必要になることが明らかになった。とくに、ギーセンとコンスタンツの大学で「詩学と解釈学」のプロジェクトに関わった、ハンス・ブルーメンベルクによる隠喩論は、受容美学を哲学的美学における新たな展開ととらえるうえで重要な役割を果たすことになる。

(3) これは言うまでもないことであるが、イメージ研究のグローバル展開のなかで受容コンテクスト研究の重要性は増している。とくに、ヒトが視覚コミュニケーションに使用する「イメージ」の特性の普遍項について

の研究は今後も解明が必要になると思われる。

2. 第二の目的は、今回の研究成果を今後の講義や演習などに応用していくことにあった。

研究期間中に訪れた内外の多くの美術館や美術展では、受容のコンテクストをめぐる諸問題を、具体例を目の前にして考察することができた。このことは、学部や大学院の学生たちを指導するうえで示唆に富む貴重な経験であった。とくに近年の美術史研究ではコンテクストに着目することの重要性が頻繁に語られている。今後は、そのことを学生たちの指導にも反映させていくことにする。

3. さらに、第三の目的として、このテーマに関連するテクストのドイツ語原文を日本語化することで、可能であれば翻訳出版を行い、広く社会全体へと還元していくことも想定していた。翻訳する具体的なテクストには、ケンプによる2006年の著作『北斎の富嶽百景』を選んだ。翻訳は現在も継続中である。今後は、残された部分の日本語化を急ぎ、できるだけ早い時期に出版社を見つけて公刊にこぎつけたい。

◆研究の遂行過程

1. 2019年4月～6月

国際学会への出席のため、当初の予定を変更して、その前に6月18日から24日までドイツ（ミュンヘン）とイタリア（ヴェネツィア）に出張した。ミュンヘンでは聖母教会において宗教美術における作品と共同体との関係について、ヴェネツィアではビエンナーレ会場にて現代アートにおける受容者の役割について資料の調査収集を行った。

2. 2019年7月～9月

7月21日から29日まで、セルビアのベオグラード大学で開催された国際美学会議に出席。” Aims and Limits of Global Art Studies” について7月27日（金）に研究発表を行った。この発表で取り上げたテーマである、アートをめぐるコンテクストのグローバル化は、受容美学の普遍性に関わる問題であり、発表後の討論で多くの参加者から有益な助言を得た。

3. 2019年10月～12月

この時期には、おもに関西地域で開催中の展覧会に出向き、西洋美術（12月25日、カラヴァッジョ展、あべのハルカス美術館）、工芸（10月11日、バウハウス展、西宮大谷記念美術館）、近世近代美術（11月1日、円山応挙展、京都国立近代美術館）、とくに現代アート（11月4日、アートアニュアル展、高松市美術館、11月18日、岡山芸術交流、市内各所）と受容者との関係について資料を調査収集した。

4. 2020年1月～3月

以上の成果をもとに報告論文（「ヴォルフガング・ケンプ――境界を越える美術史家」『人文論究』第70巻1号[2020年5月発行予定]に所収）を作成した。

また、論文執筆と翻訳準備のために下記2件の資料調査出張を行った。

・1月21日（東京日帰り出張）

東京国立博物館および太田記念美術館において、日本美術、とくに葛飾北斎の浮世絵と「受容美学」との関連について、関係資料を調査収集した。

・2月13日から2月19日（ドイツ出張）

個人研究費の一部を旅費として使用してハンブルク、デッサウ、ベルリンに出張した。ハンブルクではハンブルク美術館を中心に、ベルリンでは「博物館島」の美術館群において、ケンプによる受容美学と関係の深いルネサンスやバロックの美術作品について画像や文献資料の調査収集を行った。また、デッサウでは旧バウハウス校舎やバウハウス美術館を訪れて、建築や工芸とその受容者との関係を明らかにするための資料を調査収集した。

◆経費の使用について

結果としては、2019年6月18日から23日のヴェネツィア出張旅費だけで、給付された予算額を超過した。成果報告論文の執筆と投稿のための諸経費、資料調査に関連する入館料やパンフレット類の購入費、図書資料の購入費、通信運搬費などは、個人研究費や図書館図書費Bなどから支出した。

以　上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内　博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。